現場に遣わされて　卒業生インタヴュー

聞き手
中野 実　教授

根拠は神様にある。躓（つまず）きを恐れず教会に仕えたい。

十貫坂教会

中野：最初に、伝道者になろうと思ったきっかけについてお話しいただけますか。

中村：私はクリスチャンホームに生まれ育ったので、生まれたときから教会に通っていました。どんなときにも教会を拠り所として考えていたと思います。大学生になって東京に出てきて、十貫坂教会に通うようになると、身近に神学生という存在がありました。そうした環境が、進路に悩んだときの献身という決断につながったのだと思います。仙台で2年浪人して、普通の大学に入学したのですが、3年になってキャンパスが変わるときに自分のしたい勉強がないことに気づいたんです。そんなとき、大学を卒業した同い年の友だちが、献身すると言い出しました。はじめは他人ごとのように思っていたのですが、単位が足りていたこともあり「一緒に編入できる、浪人したのはこのためだったのだ」という思いが与えられ、思い切って編入させていただくことにしたのです。

日本基督教団 十貫坂教会
中村恵太 牧師（なかむら けいた）

明治大学政治経済学部2年修了後、東京神学大学に編入学。2011年に大学院を修了、日本基督教団十貫坂教会3代目の主任担任教師に就任。2015年受按。

神学を学ぶ姿勢

中野：東京神学大学の学びを振り返って、どんなことが思い出されますか。

中村：神学校でいちばん学んだのは、自分が本当に思うようにいかない存在であるということです。自分のなかで、学びや牧会についての理想像をつくりあげていたのですが、それが粉々に打ち砕かれました。そのうえで、神学を学ぶ姿勢を教えていただいたように思います。

中野：つらかったことはありますか。

中村：教えていただいたことに対して打てば響くような応答がしたいのに、それができないもどかしさがありました。先生方は、本当はもっとできるのにという憐れみの目をもって忍耐されていたのでしょう。よかったことは、そんな状況でも何とかやってこられたということです。

中野：東神大の良いところはどんなことでしょうか。

中村：良いところは、教会のためということがいつも学びの念頭にあることだとと思います。単に知的好奇心を満たすのではなく、学んでいることはみな教会において用いていくことができるのです。

中野：卒業してすぐひとつの教会を任せられ、とまどいもあったと思いますが。

中村：前任の2代にわたる先生は周囲から大変評価されていました。その後を継いだ私は、全くの新人教師でしたので、教会をあげて何とかしようという動きが生まれ、支えてくれました。ですから、本当に御言葉の説教にだけ集中し、慣れるに従って徐々にできることを増やしていけるようになってきたと思っています。

神様に召し出された喜び

中野：伝道者として歩んでいることの喜びや苦しみはどのようなものですか。

中村：最大の課題は自分自身であるといつも思っています。外的な事柄は何とかできるのですが、自分の怠惰さや鈍感さがどうしようもなくまとわりついてきます。しかし、そんな自分であっても神様が用いてくださっているということが喜びです。

中野：最後に、特に献身を志す人たちへのアドバイスをいただけますか。

中村：私は、つい自分のなかに根拠を求めたくなって、こんなことができる、やれた自分だから教会に仕えていいんだと、自己義認に陥ってしまうことがありました。でも、神様に召し出されたということは、自分に根拠があるのではなく、召し出した神様の側に根拠があるのです。ですから逆にいえば、ときには大胆に踏み出して、それで一度は躓いて倒れても大丈夫なんだという思いを、最近はもつようになりました。これから献身を志す方たちにも、そう考えて、迷わずにぜひ入ってきていただきたいと思います。

■

神学校の生活は、すべてが神学の学びにつながる。

信愛の園

中野：武井先生のキリスト教との出会いをお話しください。

武井：私の生家は神社で、今は兄が神主を継いでいます。でも私は、子どものころ、神様が家の社の奥に本当にいるとは思えなかったのです。それが、高校生の時、ジイドの『狭き門』を読んで心を打たれ、教会に通うようになりました。そして洗礼を受けたのですが、父は反対もせず、洗礼式に来てくれました。その後は、就職や結婚などいろいろあって、教会ともあまり深くは関わりませんでした。

中野：神学校への入学は、どのように決意されたのでしょうか。

武井：定年退職後、東神大の公開夜間神学講座に行きましたら、ある先生が「今は献身する人が少ない」というお話をされたんです。そのとき、何かあつく燃えるような思いを経験して、その後、召命かなと思えるような出来事があり、東京神学大学への入学を決めました。

神学を学ぶ楽しさと苦しさ

中野：東神大において学んだこと、得たものはどのようなものでしたか。

武井：先生たちは、レベルの高い神学をいつも教えてくださいました。ついていけないこともあり、苦しみも味わいましたが、学ぶ楽しさも知りました。また女子寮では、1つの部屋に7、8人集まって時間を忘れてしゃべり合うこともありました。すべてが自治に任されていて、それが牧会の訓練になったようにも思います。

中野：東神大についてはどのように思われていますか。

武井：教会関係だけではなく、もっと全国に知られていいのではないかと思います。中身がとても充実していますし、授業の幅も広く、その後もそれを生かして用いていくことができる、本当にまれな学校ではないかと思います。

社会福祉法人 信愛報恩会信愛病院
武井アイ子 チャプレン（たけい あいこ）

看護師を定年退職後、東京神学大学に編入学。2011年に大学院を修了、社会福祉法人信愛報恩会のチャプレン、日本基督教団清瀬信愛教会協力教師に就任。2015年受按。

中野：実際のお働きのなかで、神学校での学びの課題を感じたことはありますか。

武井：私は、チャプレンとして患者さんと関わるようになりました。ですから、臨床心理や患者さんに対応する技術を学んでおけばよかったと思いました。

中野：チャプレンとしてのお働きへ、ご自身の希望で行かれたのですか。

武井：私は、前職が看護師でしたので、そういうことから、学長が勧めてくださったのだと思います。

神様が支えてくださる

中野：チャプレンとは、具体的にどのようなお働きをされるのですか。

武井：ホスピス病棟の患者さんのスピリチュアルケアを中心に行っています。入院時の問診票に書かれた宗教との関わりや看護師さんの情報から、お話ができそうな方の部屋を訪ねて最初は普通のお話をし、興味がある方には宗教的なお話もします。一緒にお祈りさせていただいたり、キリスト者の方とは聖書を一緒に読んだりもします。また、院内礼拝や職員朝礼拝、それからクリスマスや賀詞交歓会など、さまざまな行事もあります。

中野：伝道者として歩んでいることの喜びや苦しみはどういうものですか。

武井：私はやはり、自分が至らないこともあり、試されているんだと思います。説教を準備するときには何日間かの苦しみがあり、できあがったときには神様が助けてくれたという喜びがあります。

中野：伝道者の道を歩み出そうとされている方に、何かアドバイスがありますか。

武井：やはり呼びかけられたら「はい」と応えていただきたいと思います。経済的な問題をはじめいろいろなことを考えるとなかなか踏み出せない場合もあるかと思いますが、神様は必ずそれを支えてくださる用意をされていますので、ぜひ踏み出していただきたいと思います。

■